

フランスのミドルクラス・ムスリムの 階級的な差異化に関する一考察

山下 泰幸

はじめに

今日のフランスには、総人口の8.8%に当たる572万人のムスリムが暮らしているとされ、同国のムスリム人口の規模はEU加盟国の中でも最大である（Pew Research Center 2017: 4）。フランスのムスリムの8割以上が北アフリカのマグレブ三国のいずれかにルーツを有しており、その43.2%がアルジェリア、27.5%がモロッコ、11.4%がチュニジアをルーツとする（Tribalat [2004] 2008: 28）。ムスリムを標的としてその文化的差異を強調する、レイシズムの一形態であるイスラモフォビア（islamophobia、イスラーム嫌悪）が吹き荒れる現代フランス社会で生まれ育ったマグレブ系二世のムスリムたちは、依然として被差別的な地位を強いられてはいるものの、その一方で、彼女ら彼らの高学歴化や階級的な多様化が確認されてきた（Khosrokhavar 2016; Institut Montaigne 2016）。

フランスのムスリムの（スティグマ化された）表象やアイデンティティの研究は、マイノリティであるムスリムと、マジョリティである非ムスリムとの間の権力関係や相互作用という側面から、二項対立図式に基づいて分析されることが多く、そこではしばしばムスリムの多様性・非均質性が忘却される傾向にある。そこで本研究では、ミドルクラス（classes moyennes、中流階級）のムスリムが庶民階級（classes populaires、下層階級）のムスリム（たち）をどのように差異化・スティグマ化しているかという、階級を異にするムスリム間で見られる実践を検討する。具体的に本稿は、非常に高い学歴を有し、有名グローバル企業で働くアルジェリア系二世のハキム⁽¹⁾というムスリム男性のインタビューデータに基づき、彼が移民やその子孫にあたる庶民階級が集住していると想定される「(大都市) 郊外 (banlieue)」の人びとと自らを差異化しながら、自分自身は文化的な多様性に関与した存在であると語るさまを分析する。その際には特に、エスニック・アイデンティティやコミュニティを非正当化するフランスの国民統合イデオロギーである「共和主義（イデ

(1) 以下、インタビューに基づく人名や地名は、適宜、仮名に置き換えている。

オロギー)」の影響や、また、庶民階級と距離を取りながら、個人的な努力に基づいた社会・経済的な成功を強く志向するミドルクラスの階級文化といった観点から考察を行う。

以下の第1節ではまず本研究の背景となる社会的文脈を把握するために、フランスにおけるイスラモフォビアの現状と共和主義イデオロギーに簡単に触れた後に、ムスリムの階級的な多様化について述べる。つづく第2節では先行研究の整理を行い、本研究が立脚する階級概念ならびにミドルクラスがどのように扱われてきたかについて、さらに今日的なイスラーム表象の研究についてまとめる。第3節では、本稿の中心的な分析に進む前に、ハキムというひとりの人間がフランス社会のなかでどのような位置におかれてきたか、その社会的経路を理解するためにライフヒストリーをまとめる。そして第4節では、ハキムが、「郊外」を代表する人物である幼なじみのアブドゥルと自らをどのように差異化しているかという主題を、「好みの女性」に関する語りから明らかにする。ただし第5節でみるように、ハキムはこうした差異化を行いながらも、一方で自身もまた移民の子孫としての不安定な生を送っており、差異化と共感の間で、その感情が揺れ動いている。第6節では、ミドルクラスのアイデンティティという観点に特に注目しながら、自らの学業的・経済的な成功に関する語りや、文化的な多様性に関する語りを分析する。結論部では、本稿で用いたアプローチの意義を総括する。

1 フランスのイスラームとムスリムの階層的多様化

1-1 フランス社会とイスラモフォビア

19世紀から20世紀にかけてマグレブ三国は、フランスによる長期にわたる苛烈な植民地支配と、多くの犠牲を伴う独立運動や独立戦争を経験した。これらの国々からの（旧）宗主国フランスへの労働移住は、20世紀の初めごろから既に開始されていたが、第二次世界大戦の終結後にさらに大規模化していく。マグレブからの移住の背景には、フランスとこれらの国々との間の著しい経済格差や、植民地支配が引き起こした伝統的な産業や農村共同体の破壊、それに伴う失業者／無産市民の増加が指摘できる（Stora [1991] 2004=2011; Renard 2010）。これらの移住労働者の存在は、二度の世界大戦によるフランス社会の人口喪失および相対的に低い出生率を補完し、戦後復興やそれに続く高度経済成長という同国の工業化の進展を支える安価な労働力として、フランス社会にとって必要不可欠であった（Noiriel [1988] 2006=2015: 343-67）。1970年代半ばには経済不況によって新規労働移民の受け入れが停止された一方で、その頃から新制度によって出身国からの家族の呼び寄せが拡大した。その後、世代更新が進み、現在ではフランス生まれフランス国籍の

マグレブ系移民二世や三世が大都市圏を中心に多く暮らしている（山下 2022: 23-4）。

フランス社会においてマグレブ系の人々は非常に顕著なやり方で他者性を付与されるエスニック・マイノリティとなっており、とりわけアルジェリア系の人びとは、今日に至るまで移民現象に由来する種々の社会問題の象徴としてあつかわれてきた（Silverman 1992）。彼女ら彼らを他者化する論理は時代とともに変化しており、1990 年代後半、とりわけ「9.11」以降では、「ムスリム」として、イスラームという信仰に関連した側面からスティグマ化されるようになってきた（Allevi 2005; Arslan 2010）。マグレブ系には実際にはベルベル人が多く（Hargreaves 1995=1997: 73）、また、ムスリム家庭出身者を対象に行われた調査によると、イスラームを信仰していると回答した者は 75%にとどまり、ムスリムではないマグレブ系の人びとも少なくないが（Ifop 2011: 7）、それにもかかわらずマグレブ系＝アラブ人＝ムスリムといった粗雑な認識が浸透している。今日ではさらに、国内で繰り返し発生するイスラームを標榜した殺戮事件などを背景に、ムスリムを「原理主義」や「テロ」と結びつけるような言説が増加している（Hajjat et Mohammed [2013] 2016）。

ムスリムの 42%が宗教に結び付いた直接的な差別被害の経験を有しており（Ifop 2019: 7）、関係機関に対して報告された憎悪行為の被害件数も前年度比 17%、前々年度比 77%の激増を見せている（CCIF 2020）。架空の人物の履歴書を企業に送付し、その反応を集計するという実験の結果からは、ムスリムやイスラーム文化圏にルーツを有する人びとに対する激しい就職差別の実態が明らかにされてきた。たとえば、各宗教の信者に対する雇用状況を比較調査した実験では、面接に行きつくまでに、ムスリムの「モハメッド」という名の人物は、カトリックの「ミシェル」という人物よりも 4 倍多くの会社に応募する必要があった（Institut Montaigne 2015）。

以上のような偏見の高まりおよび差別行為の拡大を鑑みると、イスラモフォビアがフランス社会を席卷している状況であると言える。それに加えて、次項で述べるライシテもしくは「治安上の懸念」を根拠とした頭部にスカーフなどを着用するムスリム女性の社会参加を制限する法の制定や、「過激思想」と無関係なムスリム個人や組織に対する家宅捜索や解散命令（ADM 2020）など、ムスリムを標的にした立法や司法による判断が目立っており、国家によるイスラモフォビアの制度化が進行している（山下 2022: 23-4）。

1-2 共和主義イデオロギーとライシテ

フランスにおいて「共和国」とは統治の一形態であると同時に、個人の平等を保障する共生の理念としてみなされてきた（中野 2009: 15-6）。そこから導き出される「共和主義イデオロギー」とは、人種・エスニシティ・宗教・言語などに基づいた中間集団の権利を否

定し、均質な個人が国家に直接帰属することを是とする、フランス国民の統合原理のことであると定義できる。これは、「一にして不可分の共和国」（第五共和制憲法前文）というフランス国家の自己規定に見られるように、内的統一性を重視し、地域主義やマイノリティの存在に警戒的な、同質的な国民共同体の神話を強調するイデオロギーである（中村 2016: 166）。共和主義イデオロギーは、公共領域と私的領域の明確な分離を前提とする二元的な社会観をとっており、「私的領域」では出自や人種、宗教などの属性を自由に享受し、「公的領域」においては同質かつ平等な抽象的個人として主権を行使したり公的事項に参加したりすることができる（中野 2009: 16, 2015: 19）。

同様の思考様式を、国家と宗教の関係性に対して適用することで生じる概念であるライシテ（laïcité）は、日本語で政教分離原則とも訳され、公共空間における非宗教性と、私的空間における信仰の自由を両立させる原理であるとされてきた。しかしイスラモフォビアの高まりとともに、植民地主義を引き継ぐようなライシテのナショナル・アイデンティティへの傾斜（Baubérot 2014）が生じており、今日ではライシテはイスラームへの敵対およびムスリムの排除を正当化するための道具として用いられる傾向にある。リベラリズムに立脚するはずの共和主義やライシテといった諸概念は、個人の自由やリベラリズム自体をも脅かす類のナショナリズムと区別がつかなくなっている（Joppke 2009=2015: 205）。ライシテは国家の中立性や異なる宗教間の共生を保障する原理ではなく、単なる非宗教原則へと矮小化されて援用されていると考えられる。

1-3 ムスリムの階級的な多様化

フランスでは、先に述べたネーション統合原理である共和主義イデオロギーを理由として、人種、エスニシティや宗教に基づいて国民を集計・分類するようないわゆる「エスニック統計」が国民の分断を生むとして法律で禁じられてきた。第三共和政期の 1872 年に最後に実施されて以来、ナチスドイツの傀儡であったヴィシー政権期の反ユダヤ主義を動機としたものを除けば、国家によるエスニシティや民族を基準とした分類統計は一度も実施されていない（Sénat 2022）。そのためムスリムのおかれた状況が明らかとなるような数量的なデータは限定的にしか存在しない。

フランスの政権与党と近い関係にあるシンクタンクであるモンテーニュ機関の報告書によると、社会職業分類（PCS: la profession et la catégorie socioprofessionnelle）に基づいて職種を整理した場合、ムスリムと自己申告している 15 歳以上のものの 24% が「（ブルーカラー）労働者（ouvriers）」、22% が「（ホワイトカラー労働者、接客業など）一般事務職（employés）」、4.5% が「高級管理職（cadres supérieurs）および士業（professions

libérales) に就いていた。アッパーミドルクラス (classes moyennes supérieures) の典型的な職種として扱われる「高級管理職および士業」の比率は、無宗教者では 10%、カトリック教徒では 8% となっており、ムスリムの場合は相対的に低い (Institut Montaigne 2016: 20)。その一方で、「(ブルーカラー) 労働者」の比率の高さからは、ムスリムが相対的に見て庶民階級に集中しがちであることが推測できる。また、フランスの世論研究所が同じく社会職業分類にもとづいて、18 歳以上のムスリムとフランス人全体のそれぞれの職種の比率を比較した以下の図 1 においても、同様の傾向が確認できる。

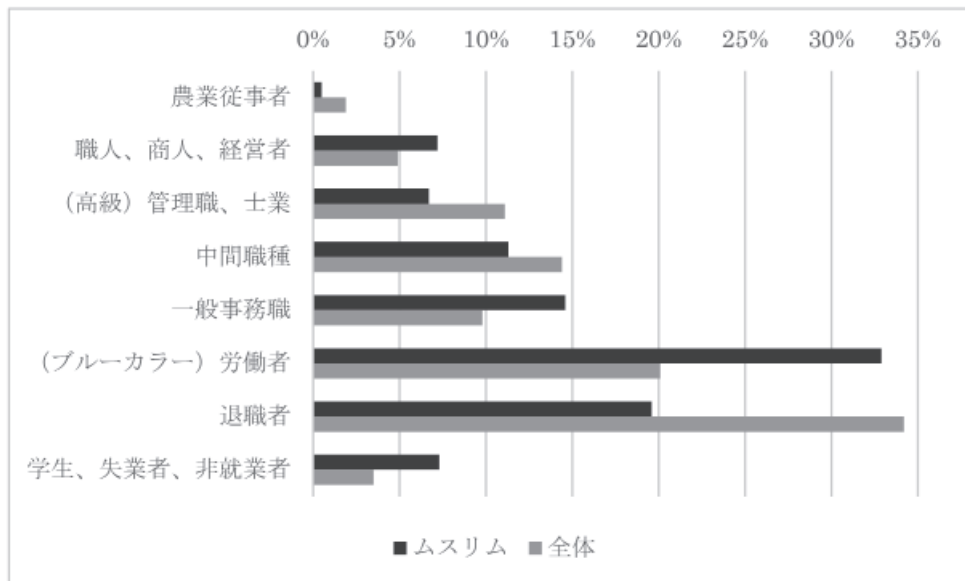


図 1 ムスリムとフランス人全体の社会職業別分類の比較

Ifop (2011) をもとに作成

ただし退職者の比率の大きな違いからもわかるように、ムスリムとそうでないものとの間の年齢構成に大きな差異が存在しているため、こうした単純な比較を行う際には留保が必要である。モンテーニュ機関の調査でも、被調査者のムスリムの平均年齢 35.8 歳に対して、無宗教では 43.5 歳、カトリック教徒では 53 歳というように、その差は顕著である (Institut Montaigne 2016: 20)。今後は、調査データがより広く公開され、年齢を統制した比較が実施されることが求められる。

他方でこうした統計結果からは、たとえばアッパーミドルクラスに典型的な職種とされる「高級管理職および士業」や、ロウワーミドルクラス (classes moyennes inférieures)

に典型的とされる「中間職種 (professions intermédiaires)」——たとえば技術者⁽²⁾、看護師、小中高教員——に分類されるような職に就くムスリムも確かに存在していることがわかる。相対的に見てその人口比が少ないことは間違いないものの、フランス社会においてミドルクラスのムスリムが存在していることが示唆される。

さらに今日では日本の大卒以上に相当するバカロレア (高等学校教育修了資格) プラス3年以上の高学歴のものもフランスの15歳以上のムスリムの20%を占めており、その比率はフランス社会全体の平均値に近似しつつある (Institut Montaigne 2016: 23-4)。「免状社会 (学歴社会)」とも称されるフランスでは、学校修了時に取得する免状／資格類は非常に重要であり、それが職業的地位へのアクセスに決定的な役割を果たしている (Blanchard et Cayouette-Remblière 2016=2020)。前述したように、ムスリムの場合は就職差別が存在しており、彼女ら彼らは雇用や資源の獲得競争で差別的な取り扱いを受けているため (Hargreaves 1995=1997)、ムスリムにおける学歴と職業や階級の間の関係性については慎重な検討が必要である。とは言え、一部の研究からは、過去数十年の間の世代更新とともに、学業達成を通して、マグレブ系の人びとが社会的な上昇移動に一定の規模で成功していることが量的なアプローチによって明らかにされた (たとえば Brinbaum et Guénard 2012)。また、学業的な達成を通じたムスリムの階級上昇を質的なアプローチによって分析する研究も存在している (Arslan 2010)。こうした研究は、マグレブ系のムスリムの間で、徐々に階級的な多様化が進んでおり、彼女ら彼らが一枚岩で均質なエスニック集団ではないということを実証するものである。

2 先行研究の整理

2-1 階級およびミドルクラスをいかに捉えるか

社会科学における階級や階層の概念および分類に関しては、K. マルクスをはじめとする生産手段の有無および種類に基づくもの (Marx und Engels 1848=1951) や、収入や資産の量などの客観的な指標に基づくもの (Bigot 2010) など、その定義は多岐にわたる。しかしながら以下で行われる本稿の分析では、異なる階級に属する人びとの間での自己表象と他者表象のせめぎ合いやその境界の構築に注目することで、特定の階級に属する自己を再生産する動態的な過程 (関 2009: 392; 渋谷 2010: 18) として階級を捉えるため、主観

⁽²⁾ 技術者 (techniciens) は通常、エンジニア (ingénieurs) の下で働く、技術職の人々を指す。フランスにおいてエンジニアは非常に高度の資格を有する幹部職であり、「高級管理職および士業」に含まれる。

的な階級帰属意識を重視する⁽³⁾。

文化的な次元に注目することで、ミドルクラスによる差異化／卓越化について研究を行った重要な社会学者としては、P. ブルデューの名があげられる。たとえばブルデューによると、プチブル階級——今日で言うところのロウワーミドルクラスに該当すると考えられる——の人びとは、階級脱落（déclassement）への不安のため庶民階級の文化から距離を取り、あるべき姿としての上流階級（classes supérieures）の文化になんとか接近しようとするため上昇志向にとりつかれることになる（Bourdieu 1979=1990: 97-188）。また、フランスにおけるミドルクラスへの階級帰属意識を有した人々への量的調査の結果によると、ミドルクラスになることとはすなわち、自らの社会的地位への不満が顕著に減少するということや、階級脱落という観念が芽生えるということの意味する（Bonneval et al. 2011）。

フランスのマスメディアにおいては、失業率の高さや犯罪発生率の高さ、また今日では「（イスラームの）過激派思想の温床」などとして、エスニック・マイノリティが集住し、貧困が広がっているとされる「郊外」に種々の社会問題が集約されているということが繰り返し宣伝されてきた（森 2016: 11-6; Guilluy [2015] 2019: 10）。「郊外」という概念はエスニック化されており、「郊外の若者（jeunes de banlieue）」や「団地の若者（jeunes des cités）」という表現は、単なる地域的もしくは社会的なアイデンティティのみならず、一般に移民を出自とする人びと、すなわち「アラブ人」や「黒人」であることをほのめかすものである（Arslan 2010）。そのこととはコインの裏表の関係のようであるが、C. ギリュイによると、同国におけるミドルクラスという概念は、「郊外」の排除されたエスニック・マイノリティからそれ以外の人びとを、特に「白人」を区別するために用いられている。つまりミドルクラスという概念は、それ自体が「白人」のエスノ文化的（ethnoculturel）な色彩を帯びているのである（Guilluy [2015] 2019: 18）。

ミドルクラスのムスリムに対する社会的な関心が低い理由は、単にミドルクラスに該当するムスリムの数が相対的に少ないという事実のみに帰されるものではない。ミドルクラスを「白人文化」として想定したり、庶民階級をエスニック化して認識したりするような傾向が、ミドルクラスのムスリムの存在を不可視化させているのである。

⁽³⁾ ただし、後述するミドルクラスのムスリムへのインタビュー調査の実施に際しては、事前にこうした意識を判別することは不可能であるため、職業上のキャリア形成の初期段階において重要な役割を果たすと考えられる「学歴」を基準としてインフォーマントを集めた上で、本人にミドルクラスへの階級帰属意識を確認した。

2-2 ムスリムのアイデンティティおよび表象に関する先行研究

自己同定と他者同定は相互依存的であるため、自己同定は、当該社会において一般的に他者からどのように同定されているのかによって強い影響を受ける (Brubaker 2013=2016: 290)。そのため、現代フランスのムスリム・アイデンティティそのものが、イスラモフォビアの影響を受けざるを得ない。たとえば一部の研究者らは、マジョリティから付与されるスティグマを力強く反転させてそれを肯定的な属性として引き受けるようなムスリムたちのアイデンティティ・ポリティクスに注目してきた。とりわけ公共空間においてスカーフを着用し、差異を自ら可視化するムスリム女性たちの (攪乱的) 抵抗は典型的な主題となってきた (Gaspard et Khosrokhavar 1995; Scott 2007=2012 など)。

また、E. サイドの業績 (Said [1981] 1997=2003) に端を発するような、(ポスト) 植民地主義的な文脈に由来するムスリムと非ムスリムの間の権力の非対称性を捉えつつ、ムスリム表象の問題性を指摘する研究が、フランスにおいても蓄積されてきた。これらは今日、フランスのイスラモフォビア研究の中核にあたる重要な研究群と言える (Geisser 2003; Deltombe [2005] 2007; Hajjat et Mohammed [2013] 2016)。

こうしたムスリム・アイデンティティやムスリム表象をあつかう研究の多くは、マイノリティ (=ムスリム) とマジョリティ (=非ムスリム) という二項対立的な権力構造の中で、それらを捉えるものである。しかしながら R. ブルーベーカーが指摘するように、「ムスリムたちは、非ムスリムからムスリムとして同定され、説明を求められる」だけではなく、「他のムスリムからもムスリムとして同定され、説明を求められる」 (Brubaker 2013=2017: 292)。前述したようにマグレブ系ムスリムの世代的・階級的な多様化が進展する中で、自己表象 (同定) や他者表象 (同定) はムスリム-非ムスリムの二項対立関係にとどまらず、ムスリム同士の関係性においても把握される必要がある。フランスにおけるマグレブ系移民第一世代と第二世代のムスリムの世代間の差異や葛藤についてはしばしば分析されてきたものの (たとえば Beaud 2018; 山下 2018: 46-8)、階級に着目した同世代のムスリム間での差異化に関しては、数少ない例外 (Khosrokhavar 2016) を除き、これまでほとんど検討されてこなかった。

そこで以下では、(アッパー) ミドルクラスに属するアルジェリア系ムスリム男性であるハキムが、同じくアルジェリア系のムスリムあり、「郊外」で暮らす庶民階級の同世代の若者と考えられる幼なじみのアブドゥルという人物をどのように差異化しているかを主に分析する。それにより、庶民階級のムスリムや、エスニックな紐帯を重視するようなムスリムとは異なる、差異に開かれた自己像を提示するミドルクラスのムスリムのアイデンティティが確立されているさまを検討する。

3 調査概要とライフヒストリー

3-1 調査概要

筆者は、2016年から2022年にかけて、パリ付近在住の20-40代で、北アフリカ三国のいずれかにルーツを持つ移民の第二世代にあたる、高学歴（少なくともBac+3＝大卒相当）のイスラーム教徒を対象に、対面でのインタビュー調査を実施してきた。現在までのところ被調査者は40人ほどであり、おもにライフヒストリーや幼少期のエピソードなどを聞き取ることに注力してきた。より厚みのある調査データの取得を目指して、被調査者に対しては事前にラポールを形成することを目指して、インタビュー前から複数回接触するようことをこころがけた。

以下では、そうしたインフォーマントの一人である、フランス生まれフランス育ちのアルジェリア系二世のムスリムであり、非常に高い学歴を有して現在では名の知れたグローバル企業で働いているハキムという男性の語りを分析する。ハキムがどのように「郊外」のムスリムについて語り、そこから距離化することで自らのアイデンティティを確立しているかについて注目することで、彼がそうしたことを行う「合理性」を、彼がおかれた固有の社会的文脈に結び付けながら解釈する。次項では、第4節以降のハキムの語りの分析の前提となる、彼の出自や社会的経路について概観する。

3-2 ハキムのライフヒストリー

ハキムの父はアルジェリアの都市部で、病院の食堂の給仕係であった父親と専業主婦であった母親の間に生まれ、「どちらかというと低い」階級の家庭で育った。ハキムの父は20代前半で高等教育に進学するためにフランスに留学し、学業を終えるとその後一度アルジェリアに帰って結婚相手を探し、親族の紹介によって同じ街の出身である女性と結婚した。後にハキムの母親となるこの女性は、8人きょうだいの母子家庭の出身でありながらアルジェリアで高等教育を修了していた。夫妻はそれぞれ30歳と25歳の時に共にフランスの地方中都市ベルトランに移住し、夫は医療関係の技術職として働き、妻は短期的に看護師として病院で働くも、基本的に専業主婦であった。やがて長兄のハキムと二人の妹が生まれた。なおハキムの妹たちも高学歴であり、後に二人とも医者になっている。

両親はイスラームの熱心な信仰実践者（pratiquant）であり、ハキムもまた、後述するようにグランゼコールに入学するまでは、1日5回の礼拝やラマダーン月の断食の実施、金曜日のモスクでの集団礼拝への参加、ハラール肉以外の肉類や酒を口にしないなど、家族とともに宗教的義務を遵守してきた。両親は家庭内においてアラビア語で会話や教育を

行ったため、ハキムは今日でも家族とはアラビア語でコミュニケーションを取っている。また、両親はハキムが小学校に入学する前からイスラームの啓典であるクルアーンの内容を教え始めた。さらに小学生のハキムに、毎週日曜日にモスクで行われるアラビア語講座を2年間受講させ、フスハー（正則アラビア語）の読み書きを学ばせた。このように、両親はイスラームをはじめとする自身の出自の文化を継承することに関して非常に意欲的であった。

その一方で両親は教育効果を重視して、ハキムたちきょうだいを小学校から高校まで、カトリックやマリスタなど、いずれもキリスト教の学校である名門私立校に通わせている。公立学校の無償化・義務化・非宗派化を義務付けた1881年のフェリー法の制定以来、私立学校はキリスト教文化の普及の役割を担ってきたが（Poucet 2009）、今日では私立学校は布教的性格を求められることは少なくなり、公教育制度に縛られないことから、しばしば学区制からの解放手段として利用されている（Blanchard et Cayouette-Remblière 2016=2020: 39）。公立学校が無償であるフランスにおいて、私立校は公式に生徒の選抜を実施することで学力と高い階級文化を身に着けた生徒だけを集め、将来の学歴追及により有利な環境を提供しているのである（荒井 2011）。いずれもキリスト教の私立校であった小中高時代を通して、ハキムは常に、学校にはマグレブ系の生徒およびムスリムが自分以外にはほとんどいないという環境で育った。このように、両親はハキムの学業的・職業的な成功を可能とするための高い教育投資を行っており、それによってハキムが置かれた環境は、しばしば信仰実践の継続が容易でない状況にあったと言える。エスニックな紐帯の恩恵をあまり受けずに社会化を経験してきたことは、後に分析するようなハキムのエスニック・コミュニティに対する抵抗感と結びついている。

ハキムは両親からのこうした高い教育期待に応じて、非常に厳しい選抜に勝ち抜いてきた。高校卒業後はグランゼコール入学準備学級に通った後、フランスの別の中都市に位置するビジネススクールのグランゼコールに合格した。グランゼコールとは、公立大学よりも社会的に高く評価される少数精鋭的なエリート養成の高等教育機関である。さらに彼は、ロンドンの別の学校にも留学してMBAの取得を含む修士号相当のダブルディグリープログラムを修了している。グランゼコールを卒業した後、有名大企業に正規雇用で就職し、現在は4カ国語話せる能力を生かして海外勤務をこなしている。非常に社交的な性格であり、週末には多くの友人を招くパーティを自ら主催することも多い。

グランゼコールに入学し一人暮らしを開始して以降、ハキム徐々に酒を飲むようになり種々の信仰実践も行わなくなっていった。とは言え、フランスの18歳以上のムスリム家庭出身の男性に対する調査結果によると、毎日の礼拝を行っていない者は60%、モスクの

集団礼拝に参加していない者は65%、飲酒している者は44%となっており、ハキムのような傾向のムスリムは決して少なくない (Ifop 2011: 8-13)。しかし今なお、ハキムの母親はイスラームの義務の厳格な遵守をハキムに対して要求しており、そのことが原因となってハキムと母は現在に至るまで衝突を繰り返し、今日、母子関係は良好であるとは言えない。

4 「郊外」との差異化をめぐる語り——好みの女性を巡るやりとりから

ハキムとのインタビューにおいて、筆者が『『郊外』では失業率とか犯罪率とか、そういう問題が多いって言われてるけど、こういう状況についてどう思う?』と尋ねた際、ハキムは「それは本当に重大だよ。ひとつの例を話そうかな」と前置きをした上で、以下のように回想し始めた。

ハキムにはかつて、現在では疎遠になったアブドゥルという同い年の幼なじみの友人がいた。ハキムの父とアブドゥルの父は、互いにアルジェリア時代からの親友であり、同時期にフランスに移住した。ハキムたちの家族はフランスの地方都市で暮らし、アブドゥルたちの家族はパリ近郊の庶民階級が多く住む、いわゆる「郊外」で暮らしていた。父親が親友同士であるため家族ぐるみの付き合いをしていたことから、ハキムとアブドゥルは7、8歳ごろまでは頻繁に長期休暇を一緒に過ごしていた。しかし成長とともに徐々に会う機会は減り、まったく会わなくなって数年が経過した後、ある年のイード（イスラームの祭日）の際に、ハキムはパリ郊外で暮らすアブドゥルのもとを訪れることにした。二人は鉄道の乗り換え駅にあたるパリで待ち合わせた。

あれはイードのことだったな、よく覚えてる。あいつ〔アブドゥル〕に会いに行っただ。イードはいつもアラブ人の友達と過ごしてるからってことで。駅に着いたんだけど、パリのことはよく知らなくて、金髪で青い目の女の人がたくさんいるから、一人の女の子を見て、「あの娘、超美人だな」って僕は言った。そしたらあいつは、「お前はフランス女に目がねえのか? (Tu kiffes les babtous?)」って言ってきた。babtou ってのは郊外のスラングで、フランス人の女って意味。白人女かな。悪意のある言葉じゃないけど、その、フランス女ってこと。「お前はフランス女に目がねえのか?」。わかんないよ。フランス人は好きだし、アジア人だって、アラブ人だって好きだよ。どんな人種にも綺麗な女の子はいるだろ(笑)。それは普通のことだろ?「お前はじゃあどんなのが好きなんだよ?」。そう聞いたら、[驚いたような口ぶりで]「ア

ラブ女だよ、兄弟！アラブ女！（*Les beurettes, mon frere! Les beurettes !*）。beuretteってのは……つまりアラブ人のこと。ルブー、アラブだよ。だから僕は「お前って奴は…」って言ったんだ。……あいつの文化の中では、女の子の好みすらも、アラブ人しか好きじゃないんだ。

この語りでは、好みの女性の容姿について語るという、男性同士のホモソーシャルな絆を深め合うために行われる典型的なコミュニケーションをハキムが行ったところ、アブドゥルから予期せぬ回答が返ってきたことへの驚きと戸惑いが表現されている。

まずこの語りで用いられている表現について検討を行うと、ここでは、「金髪で青い目の女性」という典型的な「白人」の容姿の通行人の女性を褒めたハキムに対して、アブドゥルはそれを「フランス女(babtou)」と表現している。babtou(バプトゥー)は toubab(トゥーバブ)という語の音節が倒置された倒語である。このような倒語はヴェルラン (verlan) と呼ばれ、フランス語のスラングにおいて頻繁にみられる形式であり (Bachmann et Basier 1984)、今日では特にヒップホップに代表されるような「郊外」の対抗文化として知られている。toubab はマリケ語やウォロフ語の単語であり、それらの話者が多いマリやセネガルなど旧フランス領の西アフリカにおいて、肌の白い人々を指すために用いられる表現であり、これが移民を介してフランスに持ち込まれ、「郊外」において浸透してきた。同様に、beurette は、「アラブ人」を指す arabe (アラブ) の音節が倒置されて be-ra-a (ブラア) となり、それが短縮され beur (ブール) となった (Bachmann et Basier 1984) ものに、フランス語で女性を表す接尾辞である -ette がついたものである。beurette という語は女性蔑視的なニュアンスを含んで用いられることも多い。

さらに「お前はフランス女に目がねえのか？ (Tu kiffes les babtous?)」とアブドゥルがハキムに尋ねるこの文章では、kiffer という動詞が用いられているが、これは北アフリカ方言のアラビア語で大麻およびそれに起因する悦楽を意味する kif に由来する。この名詞がマグレブ系の人びとによってフランス語に持ち込まれた後に、動詞化されて「大麻樹脂の煙を吸引する」という意味で用いられ、さらにそれが転じて、とても気に入る、大好きである、という意味の動詞として「郊外」の若者の間で浸透していった。

このハキムの語りの中では、彼自身の発言については「標準的」なフランス語で再現され、アブドゥルの発言については、このような一般的に「下品である」として非正当化されるスラングを非常に多く含んだフランス語で再現されている。そのスラングは、「郊外」の文化として知られるものであり、とりわけ kiffer や babtou のように、アラビア語やアフリカの言語由来の表現が用いられることで、アブドゥルのエスニシティが強調されている。

ハキムとアブドゥルはともにアルジェリア系のムスリムであるという共通の属性を有しているにもかかわらず、ここでは「郊外」で生まれ育ったアブドゥルのみが著しくエスニック化される形で回想が行われている。

次に語りの内容について検討すると、ここではどの「人種」の女性も魅力的であると考ええるハキムに対して、アブドゥルは、「魅力的に感じるのは当然『アラブ人女性』に決まっている」という態度をみせる。ここで言う「アラブ人」とは、第2節第2項でも述べたようにベルベル人などを含めて、マグレブ系全体を指す意味でも用いられていると考えられる。「魅力的に感じるのは当然マグレブ系女性である」という態度の背景には、フランスのマグレブ系の人びとの間で一定の規模で継承されているとされる族内婚（endogame）的慣習の影響がある。フランスのムスリムに対する調査によると、移民が多い地域に住んでいるほど、また学歴が低いほど、族内婚の規範は強まるとされる（Fourquet [2019] 2020: 212-9）。こうした慣習の保持には二重の意味があると考えられる。第一に、イスラームの教義においては、配偶者選択についての民族や「人種」に関する基準は存在しないが、マグレブの伝統社会では、同じ氏族の中から配偶者を選ぶという父系的族内婚の習慣がある（Bouzar 2006: 183）。フランスにおける北アフリカ系の移民に出自を持つ一部の人々の間では、「氏族内婚」から、「エスニック・コミュニティ内婚」などへと制限は緩和されつつも、依然としてこうした慣習が一定の影響力をもっているとされる（Fourquet [2019] 2020: 220-1）。第二に、今日ではそうした傾向はかなり弱まってはいるものの、たとえば一部のアルジェリア系の人びとの間では、しばしばフランス国籍の取得が「裏切り」として糾弾されてきたことが知られている（Sayad 1999: 321-71）。フランスによるアルジェリアに対する苛烈な植民地支配や独立戦争における惨禍に関する記憶が、フランス生まれの移民の第二世代にも継承され、しばしばマジョリティである「フランス人」への同化に結び付く実践は忌避される傾向にある。

さて、「『郊外』の現状についてどう思うか」という筆者の問いかけに対するハキムの回答として、この引用部の回想が語られたことを鑑みると、ハキムはアブドゥルを「郊外の文化」を代表する人物として語っていることがわかる。「あいつ（アブドゥル）の文化の中では、女の子の好みすらも、アラブ人しか好きじゃないんだ」というハキムの呆れのような嘆きからは、自分と近い属性の人間のみにはしか魅力を感じないアブドゥルに対して、ハキムが抵抗感を覚えているということがわかる。第1節第2項で述べたように、フランスでは共和主義イデオロギーの下で、エスニックな紐帯に基づくコミュニティの存在が非正当化される傾向にある。ハキムの語りの端々からはしばしばそうした規範が内面化されていることが推測される。

以下で引用する先ほどの回想の続きの部分においては、そうしたハキムの価値観がより一層顕著になる。

パリ郊外にあるあいつ〔アブドゥル〕の家に行った。……友達は全員アラブ人で、そいつらとだけつるんで、「うえーい！可愛いアラブ女のヤスミンだ。ひゅーひゅー、子猫ちゃん」みたいな感じ。「パリにもたくさん女の子はいるじゃん」て言ったら、「それはフランス女だ」って。それで、そこで僕は気づいちゃったんだ。「フランス女」が住むベルトランに僕は住んでたからね（笑）。実際、あいつはそんなに遠くに住んでたわけじゃないのに、壁があるんだ。フランスの、排除された方、つまり「郊外」の側、結局、あいつらもまたフランス人の側を排除してるんだ。つまり相互の排除が、どうしようもない状況を作ってる。それはちょっと悪循環だね。俺はお前らが嫌い。お前らも俺が嫌い。じゃあ俺はお前らがもっと嫌い。だから、両方全く同じなんだ。不快な体験だった、くそ。金髪で青い目の美人を好きになれないんだ。だから僕からすると、それは悪循環なんだ。それはお互いへの排除で、彼らにとってすごく辛いことだ。だって、悪循環の中に閉じ込められるってことで、本当の意味でフランス社会の一部になることができず、「小さな社会」の一部でしかないから。

まずはこの語りの前半部においてアブドゥルが恋愛／性的対象としてマグレブ系女性にしか関心がないというだけでなく、その交友関係もまたマグレブ系の男性のみに閉じているということが示される。そして「うえーい！可愛いアラブ女のヤスミンだ。ひゅーひゅー、子猫ちゃん」という一説からは、彼らがホモソーシャルなグループを作り上げ、路上を歩く女性を性的に対象化する、いわゆる「キャットコール」を行っている様子が示される。たしかに D. ラペイロニーがみとめるように、「郊外」には、ジェンダーをめぐる強いセグリゲーションや伝統的な社会的役割への規範的な準拠によって構造化された、男性的な秩序が存在しているものの（Lapeyronnie 2008）、一方でムスリムの多く住む「郊外」におけるジェンダー暴力や逸脱的なセクシュアリティはメディア報道などにおいてしばしば現実以上に過剰に表現されてきたことには注意が必要である（森 2015: 278-9）。フランスでは、性差別的で暴力的な加害者とされるムスリム男性と、救済されるべき無力な被害者とされるムスリム女性という、誇張されたムスリム・ジェンダー・ステレオタイプが言説的に再生産され、ムスリム（男性）の排除が正当化されてきた。長期滞在許可証の交付の条件としてジェンダー平等を尊重する誓約を行わせるという「受入・統合契約」制度が、ステレオタイプなムスリム男性表象を念頭において整備されてきたことがまさにその好例である

ように (Farris 2017: 78-114)、フランス社会におけるムスリム男性は、しばしば自らが「いかに性差別的でないか」の証明を迫られる状況の中にある。学業においても職場においても、非ムスリムが圧倒的多数を占める環境の中で生きてきたハキムが、インタビューにおいてアブドゥルの女性蔑視的な言葉遣いや実践を積極的に語り、自らと差異化していることは、ムスリム男性へと向けられるこうした社会的な圧力と無関係ではないと考えられる。

先ほどの引用部の後半部分に目を移すと、ここでハキムは自らを「フランス人の側」に位置づけ、アブドゥルに代表されるような、「排除された郊外の側」と対置している。フランスのマジョリティの側が「郊外」の人びとを排除していることを認めつつも、「郊外」の側もまた、マジョリティの側を排除しているとして、二項対立的な「どっちもどっち」的な図式でフランス社会を説明している。こうした語りでは、第2節で確認したような歴史的文脈に由来するムスリム／マグレブ系の人びとを取り巻く権力の非対称性が無化されていると言える。森千香子が歴史社会学的に実証したように、「郊外」はエスニック・マイノリティが自ら集住して閉鎖的な空間を作り出したのではなく、国家が積極的に介入し、方向づけることで生じた場所なのであり、中央で発生する社会問題を追いやり、不可視化するための「排除の空間」としての役割を担わされてきた (森 2016)。しかしながらこうした二つの世界の対立という説明は、「郊外」に集積する社会問題を、住民自身の責任に帰す語りとなっている。

5 マイノリティとしての生に対する不安の共有

ここまで見てきたような、エスニックに均質な空間やコミュニティに「閉じこもる」人びとに対するハキムの批判的な視座は、第1節第2項でみたようなエスニック・コミュニティの社会的機能を否認する共和主義イデオロギーと非常に親和的である。しかしながら、先ほど引用した語りの後半部からは、ハキムがマジョリティのフランス人と全く同じ地平から「郊外」を見ているわけではないということも明らかになる。フランス社会においてスティグマ化されるマイノリティでありながら、学業および職業上の成功をおさめ続けてきたハキムの置かれた立場は複雑であり、そのことはアブドゥルとの「分断」を語る際の感情の機微からうかがい知ることができる。

ハキムがアブドゥルとの意見の食い違いを「不快な体験だった、くそ。金髪で青い目の美人を好きになれないんだ。だから僕からすると、それは悪循環なんだ。それはお互いへの排除で、彼らにとってすごく辛いことだ」と述べるとき、その激しい感情の揺れ動きからは、「郊外の側」とそれを生きるアブドゥルを、ただ自分とは無関係の世界の話として

冷静に距離化し、切り捨てているだけではないということがわかる。ハキムにとって、幼なじみであったアブドゥルと自分の価値観の間に大きな差異があるという事実は、怒りがこみ上げるほど受け入れがたい事態なのである。

さて、ミドルクラスに属し一見すると順風満帆なキャリアを送っているかのように見えるハキムであっても、フランス社会のイスラモフォビアを完全に回避できるわけではなく、日常の中で自らのエスニックな差異に起因する差別被害を経験したり、職場において将来への不安を感じたりしている。たとえば筆者が「レイシズムとかイスラモフォビアとかの差別を受けたことはある？」と尋ねた際にハキムは以下のように答えた。

〔差別の被害を〕最後に受けたのは、そんなに前じゃなくて、パリだった。歓迎されてないってことがすぐに分かった。バーで注文しようとしたら無視されて、出て行ってサインされた……アラブ人が酒を飲む場所に何の用だ、みたいな。

これはまさに第1節第1項で述べたようなマグレブ＝ムスリムという粗雑な理解のもと、ムスリムの信仰実践に結び付けられる形で発露された差別行為である。その他にもたとえば、彼の勤務するグローバル企業では周囲にマグレブ系がほとんどいない上、以下のような状況であったため、自らの昇進に関して不利な取り扱いをされるのでは、と疑心暗鬼に陥っていたことが明かになる。

前の上司はユダヤ人で、その人の名前はすごくユダヤ風だった。イツハクっていうんだけど、他に僕が知ってるイツハクって名前の方は、イツハク・ラビン、イスラエルの首相だけだ。だからすごくイスラエル風の名前なんだ。一般的に言って、イスラエル人はあんまりアラブ人のことが好きじゃない……最初は怖かった。

F. コスロカヴァルによると、フランスにおいて共にエスニック・マイノリティであるユダヤ人とムスリムは、パレスチナ情勢や種々の陰謀論の影響も受けながら、互いに差別しあうような構造が形成されてきた。自らのエスニック集団に対する排除への対抗的暴力として、他方の集団に対する憎悪の発露がしばしば正当化されている (Khosrokhavar 2016: 72-7)。結局ハキムの心配は杞憂に終わり、この上司とは友好的関係が築かれたものの、こうした懸念やストレスは、マジョリティであれば決して感じることはないものである。

第4節の後半で引用した郊外の状況に関する語りの続きとして、ハキムは以下のように続けている。ここではマイノリティとして生きることの不安が吐露されており、「郊外」

のんびりに対する共感的な語りとなっている。

……移民だってことの問題がある。それは、僕もそれを生きてるから、ちょっとは理解できる。フランスではアラブ人扱い、だけどルーツの国に戻ったら、それがチュニジアでもモロッコでもどこだとしても、移民、つまりフランス人なんだ。……尻が二つの椅子の間にあるってこと。実際、どこが故郷かわからない。

フランスにおいても時に外国人扱いされ、アルジェリアにおいてもフランス人扱いされるという自身の経験を「尻が二つの椅子の間に挟まっているよう」と表現し、「どこが自分の故郷かわからない」とハキムは語っている。このことから、移民の第二世代にしばしば見られるような現代的な「二重の不在」(Sayad 1999; 山下 2022: 34) と言える、フランス社会と両親の出身地であるアルジェリア社会の両方における「居場所のなさ」から、ハキムが逃れられないでいることがわかる。

一般に、移民をルーツとする若者の抱える不安の大部分は経済的排除に関するものであり、ミドルクラスへの階級上昇を経験すれば問題は解消されると想定されてきた (Khosrokhavar 2016: 6)。しかしながら実際には、ハキムは移民の子孫であることやエスニック・マイノリティであることにより、レイシズムやイスラモフォビアに基づくステイグマ化や差別被害を受けるリスクを抱えていた。ハキムは自らの生きる世界とアブドゥルに代表される「郊外」の世界を区別しつつも、移民（の子孫）としての生を共有していることから、インタビューの中においても彼の取る立場や感情は複雑に揺れ動いていた。

ただしハキムは、学業的・経済的成功を可能としてきた自らの高い能力を自負しており、困難な環境でも努力で状況を変えることは可能であると考えている。次節では、こうしたハキムの考えを、ミドルクラスの価値観という側面から分析する。

6 多様性の称揚とミドルクラスの価値観

ハキムは前節で見たような、マイノリティとしての困難を経験しているからこそ、より一層、学業および経済的な面で一定の成功をおさめてきた自己の能力を高く評価している。「もし僕が『郊外』で暮らしてたら、友達は今と同じじゃなかっただろな。僕は私立学校に行ってたし、キリスト教徒の友達が多かった…同じように成功してたとは思うけど」という語りからは、庶民階級のムスリムが多く住む「郊外」で生まれ育つことのハンディキャップを認めながらも、やはり自己の成功を確信している。

才能や努力によって、状況を好転させることができるということを例証するために、ハキムは同じく移民二世である友人について筆者に語った。

……ミシェルだ。彼女はたくさんのアラブ人と一緒に車の中で暮らしてたんだ。何度も襲われたこともあった。親は彼女に働いてほしがってた。でも彼女はグランゼコールの準備学校に合格して、今はグランゼコールにいる。お金を持ってなかったけど、3,000ユーロ借りて、もうほとんど返し終わってる。彼女はそこから脱出したんだ、だからそれは可能なんだ。今は、グランゼコールはたくさんの奨学金がある……だけど、そのためには意欲が必要だ。

ハキムは、かつて家族で車中暮らし状態であったにもかかわらず、グランゼコールに入学し、借金も返済し終えたという友人を引き合いに出すことで、困難ではあるが「郊外」を脱出するための制度は整備されており、意欲があれば成功は可能であることを強調する。個人の一層の努力を求めるというミドルクラス的な価値観はネオリベラルな資本主義社会に適合的なものであり（渋谷 2010）、ハキム自身、そうした価値観のもとで厳しいエリート競争を生き延びてきた。

以下のようなハキムの語りからは、彼が自身の属する階級文化に自覚的であり、あらためて庶民階級の人びとに対して明確な差異化を行っていることが明らかになる。「フランス社会の長所ってなんだろう」という筆者の問いに対して、次のように回答した。

誰と付き合ってるかでかなり変わるね。僕はなんていうかちょっとエリートたちと付き合ってるから、みんなかなりオープンだ。良い奴のことは良い奴と言い、悪い奴のことは悪い奴と言う。しゃべる前から言い奴か悪い奴とか判断したりしない。それで、まともに話せないようなとても閉じた人たちもいる…うーん、あんまり一般的な意見はないかな。俺の視点は、みんなが違ってることだ。…フランスには本当にいろんなものがあるし、どこが良いとか悪いとかいうのは難しい。

ここでハキムは、属性にとらわれずに他者を判断することができる人びとと、偏見に基づいて他人を判断したり、「閉じた」りしてしまっている人びとがいると述べ、前者のような「オープンな」ひとびとを「エリートたち」と重ね合わせて理解している。第4節においては、異なるエスニシティの人びとを恋愛／性愛の対象としたり、友好関係を築いたりできる自己と、エスニック的に同質な人びとの間に閉じこもうとする「郊外」の人々

が対照されていたが、ここではより明白に階級を前提としながら、同種の差異が言及されている。すなわち、他者を属性に基づくスティグマで判断しないという「差異に開かれた」性質を階級文化としてハキムは説明しているのである。

さらにエスニック・コミュニティへの所属に対する否定的な感情を表明する以下の個所においては、こうした「差異に開かれた」、一種のコスモポリタンの価値観が詳しく述べられる。

〔僕は〕コミュニティ的な感情はかなり弱い。もちろんアルジェリア人であることは幸せだよ。素晴らしい文化だよ。ラマダーンとか、食事もとてもおいしいし、お茶もいいね。でも……コミュニティ的な感情、文化への所属ってのがあると、他者に対して閉じてしまいがちだ。僕はそれを望まないんだ。……アルジェリアも好きだけど、その他の文化も知りたいんだよ。当然両親はアルジェリア人だから、僕もそれ〔アルジェリアの文化〕を少し生きてるけど、でも僕はフランスで大きくなった。でもほかの国にも旅行に行けるし、アジアの文化は好きだから、アジアの国にも住みたい。それは僕の夢のうちの一つだ……すべての文化の好きなところを楽しみたい。すべてを混ぜ合わせたい。

こうした出自に縛られずに多様な文化を享受したいというコスモポリタンの志向は、グローバル化を自らの利益や幸福の最大化のチャンスとして経験する、文化資本に恵まれたミドルクラス（塩原 2012: 89）の価値観を象徴していると考えられる。とりわけ、ハキムのような移民の二世世代は、日常の中で両親から継承された文化を保持しながらも、生まれ育った社会の価値観と絶えず交渉して自己を変容し続ける必要がある（山下 2018）。そうした中でミドルクラスのムスリムたちは、しばしば自身の出自の二重性／ハイブリッド性をアイデンティティの源泉としたり、こうしたコスモポリタンの価値観においてその出自を称揚し、自己をエンパワメントしたりしている（山下 2022: 33）。

ミドルクラスは、資本主義が人々に加える「プロレタリア化」の圧力に対し、集団の連帯ではなく個人の力で抗い続ける（渋谷 2010: 21）。ハキムによるネオリベラリズムの内面化と成功のための自己努力の強調は、エスニックな紐帯を提供する中間集団の否認と無矛盾に結びついている。一般に、出自や文化を共有するコミュニティが提供してくれる社会関係資本は、人種差別などさまざまな障壁に立ち向かう際や、職を見つける際に重要な資源になると指摘されてきた（Portes 2001=2014: 129-36）。しかしながらフランスのムスリム・コミュニティはしばしば庶民階級を中心に編成されており、それによってもたらさ

れる人間関係は、ミドルクラスのムスリムにとって階級を再生産する際の資源としてはあまり有用ではない（山下 2022）。

第1節第2項で見たように、ますます排他的なやり方で解釈されるようになっているフランスのネーション統合原理を背景に、ムスリムたちは自らの「『非コミュニティ的』側面（le côté « non-communautaire »）」（Khosrokhavar 2016: 43）を証明するよう駆り立てられている。ハキムはエスニック・コミュニティへの依存を忌避し、距離を取ることを、ミドルクラスの階級文化によって合理化しており、そのことによって、共和主義イデオロギーによって正当化されるような社会的抑圧を真正面から受け止めて自尊心を削られる可能性は、幾ばくか減じられていると考えられる。

一般にエスニック・マイノリティを研究する際には、エスニック・コミュニティを調査の対象として選ぶ傾向や、エスニシティが維持されている確率が高いような場所（集住地域）に焦点を当てる傾向があり、際立ってエスニックな特徴を持つ場から外に移動した人々は見落とされがちである（Conzen 1996; Morawska 1994）。ハキムのような、「ネオリベラリズムのプロジェクトを肯定的に受容しつつ、そこに開けた新たな機会を積極的に利用し望ましい自己の獲得を企図するミドルクラス」（関 2009: 405）の姿に注目することは、フランスのムスリム研究において欠落しがちであった視座を補完するものである。ムスリムを一枚岩に捉え、個人の実践をイスラームの教義によって説明するような過度に文化主義的なアプローチから距離をとり、階級をはじめとする多様な変数を分析視角として用いることが重要である。

結論にかえて

本稿ではまずフランス社会においてムスリムの置かれた状況を分析する際に欠かせない、イスラモフォビア一般の現状や共和主義イデオロギーといった鍵概念についてまとめた後に、ひとりの個性あるミドルクラスのムスリムの青年のこれまでの人生の経路を概観した。アルジェリアからフランスに移住して一定の経済的成功をおさめた高学歴な両親によって、高い教育的投資を受けながら育てられたハキムは、イスラームをはじめとするエスニックな資源を継承しつつも、過去から現在に至るまで、ほとんど周囲にムスリムのいない環境の中で生きてきたため、エスニックな紐帯の恩恵をあまり受けずに社会化を経験してきた。

そしてハキムがどのように「郊外」の幼なじみについて語るかという、非常に個人的で卑近な主題を、異なる階級間での境界の構築に注目して分析することで、階級というマク

ロな構造がひとりのムスリムの生にどのような影響を与え、そしてひとりの実践がそれをどのような形で顕在化させるのかについて検討した。ハキムによる回想で用いられる、スラングをちりばめた言葉遣いは、「郊外」で暮らすアブドゥルを過度にエスニック化するものであり、その語りの端々には、エスニック的に同質な集団に留まろうとするアブドゥルに対する当惑や呆れが表現されていた。ただしハキムもまた、フランス社会のイスラモフォビアやレイシズムから完全に逃れられるわけではなく、より周縁化された「郊外」の人びとが直面する社会的抑圧の経験の一部を共有していることが語られた。こうした複雑な社会的配置の中でハキムは、学業的・職業的な成功を達成するために、ネオリベラリズムの影響を受けたミドルクラスの価値観に基づいた思考様式によって、ネーションの統合イデオロギーとの衝突をうまく回避する生き方を示していた。

たとえば2010年代からフランスで流行している「新しい地理学 (la Nouvelle Géographie)」の影響を受けた、フランス社会の階級的な断片化の議論においては、グローバル化した世界状況に適合可能な大都市在住のリベラルなエリートと、地理的辺境に住みナショナルな枠組みで思考する人びととの分断の拡大が分析されてきた (Fourquet [2019] 2020; Guilluy [2015] 2019)。本稿から示唆される、差異に開かれたコスモポリタンの文化を有するアッパーミドルクラスのムスリムと、閉鎖的なコミュニティを構築する庶民階級のムスリムの分断という主題は、このような階級的な分断の議論と重なるものである。すなわち、フランス社会一般に階級的な分断が生じているのと同様に、ムスリムたちもまた多かれ少なかれ階級的に分断されているのである。このように、ムスリムの有する差異を過度に強調し、分析の前提とするのではなく、ムスリムとそうでないものの共通性にむしろ注目することで、スティグマ化されたムスリム表象を再生産しないような社会学的研究のあり方を模索することが重要である。なぜならそうした研究は、ムスリムの差異を言い立ててその共存不可能性を主張するような今日のイスラモフォビアに対する、対抗言説となりうるからである。

本稿では紙幅の都合で、階級以外の多くの重要な変数（ジェンダー、世代、年齢、エスニックな出自など）を十分に考慮に入れることはできなかった。今後はそうした視座を重視した論文を執筆する予定である。

参考文献

- ADM, 2020, *Contribution d'Action des Musulmans (ADM) sur la haine antimusulmane en France pour le Rapporteur Spécial des Nations Unies sur la liberté de religion.*
- Allevi, Stefano, 2005, "How the immigration has become Muslim," *Revue Européenne des Migrations*

- Internationales*, 21 (2): 2-21.
- 荒井文雄, 2011, 「フランスにおける学校選択と社会階層」『京都産業大学論集』28: 287-317.
- Arslan, Leyla, 2010, *Enfants de l'islam et de Marianne: Des banlieues à l'Université*, Paris: Press Universitaire de France.
- Bachmann, Christian et Luc Basier, 1984, « Le verlan: argot d'école ou langue des Keums ? », *Mots: Les langages du politique*, 8: 169-87.
- Baubérot, Jean, 2014, « Une laïcité conviviale », *Revue du MAUSS*, 43 (1): 191-202.
- Beaud, Stéphane, 2018, *La france des Belhoumié portraits de famille (1977-2017)*, Paris: La Découverte.
- Bigot, Régis, 2010, *Fins de mois difficiles pour les classes moyennes*, La Tour-d'Aigues: Editions de l'Aube.
- Blanchard, Marianne et Joanie Cayouette-Remblière, 2016, *SOCIOLOGIE DE L'ÉCOLE*, Paris: La Découverte. (園山大祐監修, 田川千尋訳, 2020, 『学校の社会学——フランスの教育制度と社会的な不平等』明石書店.)
- Bonneval, Laure, Jérôme Fourquet et Fabienne Gomant, 2011, *Portrait de Classes moyennes*, Fondapol.
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: critique sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit. (石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタンクシオンⅡ——社会的判断力批判』藤原書店.)
- Bouzar, Dounia, 2006, « Le mariage mixte », Philippe Yacine Demaison ed., *L'Islam dans la cité: Dialogue avec les jeunes musulmans français*, Paris: Albin Michel, 181-5.
- Brinbaum, Yaël et Christine Guénard, 2012, « Parcours de formation et d'insertion des jeunes issus de l'immigration au prisme de l'orientation », *Formation emploi Revue française de sciences sociales*, 118: 61-82.
- Brubaker, Rogers, 2013, "Categories of Analysis and Categories Practice: A Note on the Studies of Muslims in European Countries of Immigration," *Ethnic and Racial Studies*, 36(1): 1-8. (佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳, 2016, 「分析のカテゴリーと実践のカテゴリー——ヨーロッパの移民諸国におけるムスリムの研究に関する一考察」『グローバル化する世界と「帰属の政治」』明石書店, 288-301.)
- CCIF, 2020, *Islamophobie en France: Rapport du Collectif Contre l'Islamophobie en France sur l'année 2019*.
- Conzen, Kathleen N., 1996, "Thomas and Znaniecki and the Historiography of American Immigration," *Journal of American Ethnic History*, 16 (1): 16-26.
- Deltombe, Thomas, [2005] 2007, *L'islam imaginaire: La construction médiatique de l'islamophobie en France, 1975-2005*, coll. « Champs », Paris: La Découverte.
- Farris, Sara, 2017, *In the Name of Women's Right: The Rise of Femonationalism*, London: Duke University Press.
- Fourquet, Jerome, [2019] 2020, *L'archipel français*, coll. « Points », Paris: Seuil.
- Gaspard, Françoise et Farhad Khosrokhavar, 1995, *Le foulard et la République*, Paris: La Découverte.
- Geisser, Vincent, 2003, *La nouvelle islamophobie*, Paris: La Découverte.
- Guilluy, Christophe, [2015] 2019, *La France périphérique: Comment on a sacrifié les classes populaires*, coll. « Champs », Paris: Flammarion.
- Hajjat, Abdellali et Marwan Mohammed, [2013] 2016, *Islamophobie: Comment les élites françaises fabriquent le « problème musulman »*, coll. « Poche », Paris: La Découverte.
- Hargreaves, Alec G., 1995, *Immigration, 'race' and ethnicity in contemporary France*, London: Routledge. (石井伸一訳, 1997, 『現代フランス——移民からみた世界』明石書店.)
- Ifop, 2011, *ANALYSE: 1989-2011: Enquête sur l'implantation et l'évolution de l'islam de France*.
- , 2019, *ETAT DES LIEUX DES DISCRIMINATIONS ET DES AGRESSIONS ENVERS LES MUSULMANS DE FRANCE: Enquête réalisée auprès de 1000 personnes de confession musulmane*.
- Institut Montaigne, 2015, *Discriminations religieuses à l'embauche*.
- , 2016, *Un islam français est possible*.
- Joppke, Christian, 2009, *Veil: Mirror of Identity*, Cambridge: Polity Press Ltd. (伊藤豊・長谷川一年・竹島博之訳, 2015, 『ヴェール論争——リベラリズムの試練』法政大学出版.)

- Khosrokhavar, Farhad, 2016, *Les Français de confession musulmans et leur malaise: De l'aliénation culturelle à la désappropriation sociale*, FMSH.
- Lapeyronnie, Didier, 2008, *Ghetto urbain: Ségrégation, violence, pauvreté en France aujourd'hui*, Paris: Robert Laffont.
- Marx, Karl und Friedrich Engels, 1848, *Manifest der Kommunistischen*, London: Partei. (大内兵衛・向坂逸郎訳, 1951, 『共産党宣言』岩波書店.)
- Morawska, Ewa, 1994, "In Defense of the Assimilation Model," *Journal of American Ethnic History*, 13 (2): 76-87.
- 森千香子, 2016, 『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会.
- , 2015, 「現代フランスにおける『スカーフ論争』とは何なのか」越智博美・河野真太郎編『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」——格差、文化、イスラーム』, 269-91.
- 中野裕二, 2009, 「移民の統合の『共和国モデル』とその変容」宮島喬編『移民の社会的統合と排除——問われるフランス的平等』東京大学出版会, 15-29.
- , 2015, 「共生の理念から排除の道具へ——『フランス的統合』の変化の意味するもの」中野裕二・森千香子・エレン・ルバイ・浪岡新太郎・園山大祐編『排外主義を問いなおす——フランスにおける排除・差別・参加』勁草書房, 15-40.
- Noiriel, Gérard, [1988] 2006, *LE CREUSET FRANÇAIS: Histoire de l'immigration XIX^e-XX^e siècle*, coll. « Points », Paris: Seuil. (大中一彌・川崎亜紀子・太田悠介訳, 2015, 『フランスという坩堝——一九世紀から二〇紀の移民史』法政大学出版局.)
- Pew research center, 2017, *Europe's Growing Muslim Population*.
- Portes, Alejandro and Rubén G. Rumbaut, 2001, *LEGACIES: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkely: The University of California Press. (村井忠政・房岡光子・大石文朗・山田陽子・新海英史・菊池綾・阿部亮吾・山口博史訳, 2014, 『現代アメリカ移民第二世代の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.)
- Poucet, Bruno, 2009, *La liberté sous contrat: Une histoire de l'enseignement privé*, Paris: Fabert.
- Rémond, René, 2005, *L'Invention de la laïcité française: De 1789 à demain*, Montrouge: Bayard. (工藤庸子・伊達聖仲訳解説, 2010, 『政教分離を問い直す——EU とムスリムのはざま』青土社.)
- Renard, Michel, 2010, « Les débuts de la présence musulmane en France et son encadrement, » Mohammed Arkoun (dir.), *Histoire de l'islam et des musulmans en France: du moyen âge à nos jours*, Paris: Albin Michel, 748-74.
- Said, Edward W., [1981] 1997, *Covering Islam: How the Media and the Experts Determine How We See the Rest of the World*, Rev. ed., New York: Vintage Books. (浅井信雄・佐藤成文・岡真理訳, 2003, 『イスラーム報道』みすず書房.)
- Sayad, Abdelmalek, 1999, *La double absence: Des illusions de l'émigré aux souffrances de l'immigré*, Paris: Seuil.
- Scott, Joan W., 2007, *The politics of the veil*, Princeton: Princeton University Press. (李孝徳訳, 2012, 『ヴェールの政治学』みすず書房.)
- 塩原良和, 2012, 『共に生きる——多民族・多文化社会における対話』弘文堂.
- 関恒樹, 2009, 「トランスナショナルな社会空間における差異と共同性——フィリピン人ミドルクラス・アイデンティティに関する考察」『文化人類学』74 (3): 390-413.
- Sénat, 2022, *RAPPORT D'INFORMATION, 757: De l'Islam en France à un Islam de France, établir la transparence et lever les ambiguïtés*.
- 渋谷望, 2010, 『ミドルクラスを問い直す——格差社会の盲点』NHK 出版.
- Silverman, Maxim, 1992, *Deconstructing the Nation: Immigration, Racism and Citizenship in Modern France*, London: Routledge.
- Stora, Benjamin, [1991] 2004, *Histoire de l'Algérie coloniale 1830-1954*, coll. « Repères », Paris: La Découverte. (小山田紀子・渡辺司訳, 2011, 「第I部 植民地期 (1830～1954)」『アルジェリアの歴史——フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化』明石書店, 23-190.)
- Tribalat, Michèle, [2004] 2008, « Le nombre de musulmans en France. Qu'en sait-on ? », Yves Charles Zarka, Sylvie Taussig et Cynthia Fleury (dir.), *L'Islam en France: Cités, hors série*, coll. « Quadrige », Paris: PUF, 21-31.
- 山下泰幸, 2018, 「ハイブリッド文化としてのフランスの新しいイスラーム——信仰実践を回避する移民第

二世代のムスリムの語りから」『ソシオロジ』 63 (1): 39-57.

———, 2022, 「ミクロな観点における同化とポストコロニアル性——フランスの高学歴なムスリム女性の語りから」『ソシオロジ』 67 (1): 21-39.

(やました やすゆき・博士後期課程)